

## 原人まっりの歴史

昭和の初めごろの大久保町西八木海岸の屏風ヶ浦は、約15mほどの切り立った崖で、太古の昔から現代までの地層を一目で観ることができたそうです。

一番下にある青粘土層は100万年前にできた地層で、その上には8~13万年前にできた砂礫層が乗っていました。

オーストラロピテクスやホモ・ハビリスといった猿人が200万年前から50万年前、ピテカントロプスや北京原人が50万年前に出てきて、旧人と呼ばれるネアンデルタール人が3~5万年前に存在したと言われていていますから、これらの地層がどのくらいの時間を有しているか お分かりになられると思います。

しかしながら、武士の時代が終わり、文明開化の明治を経て、短い大正が昭和に移ったこの当時は、日本には旧石器時代以前に人類がいたとは考えられていなかったようです。まだまだ国も貧しく、人々は太古の世界に思いをはせる余裕などありませんでしたし、海外からも「ない」と思われている日本の旧石器時代など探しに来るわけでもありませんでした。

直良信夫は、本名を村本信夫と言います。

大分県臼杵市に生まれた信夫の家は、かつては由緒正しい武家だったそうですが、時代が変わり、信夫が生まれた明治35年には、貧しく 信夫は子供のころから家の手伝いに明け暮れる毎日を過ごしていたようです。

学ぶことが贅沢だった時代、勉強する時間がなければ 勉強したいと望むのが人の習い。

信夫は、歴史に興味を持ち、わずかな時間を見つけて 少ない教材を何度も何度も読んで学んだそうです。

ある時、宇宙の成り立ちや地球に棲んできた生物の進化、人類の発達、生活などについて書かれた「宇宙生物及び人類創世」という本を読んで、太古にあこがれを持ち始めました。

何とか勉強したいという思いから、当時 考えられる限りの工夫をして、信夫は学べる環境を手に入れようと、東京へ行き、臼杵に帰り、再び東京に出て、という変遷をたどりながら、大正13年 明石に落ち着きます。

誰もが旧石器時代への関心など持たなかった時代に、信夫は旧石器時代の存在の可能性を求めて明石の西海岸～林崎から二見まで約10KM～を探ることを日課にしていきます。

中でも、旧象の化石や貝や植物の化石などが出る西八木海岸は、信夫にとって何とも楽しい場所でした。

信夫は大蔵谷（現在の東人丸町）の自宅から毎日のように西八木海岸に通い新しい発見を重ねていたそうです。

昭和6年4月18日のことでした。

信夫は前日の明石特有の強い偏西風によって崩れ落ちた鼠色の砂質粘土層の中に八分ほど埋もれて突き出している茶色い物体を発見します。

それは確実に化石化した人類の腰骨でした。

この化石化した腰骨には青い土がついていたので、埋もれていたのは青粘土層に接した砂質粘土層だったのでしょう。

信夫は、体中が震える思いだったと語っています。

何しろ、世界中が日本には旧石器時代以前に人類などいなかったと考えていたのですから…信夫が発見したその人類の腰骨がそんな地層に埋もれていたということは、世界に信じている歴史を変える必要があると迫ってきたことを意味します。

信夫はアマチュアの考古学者だったので、専門家に鑑定してもらうために東京や京都等の大学の学者数人に手紙を出します。

やがて、4月23日付で東京帝国大学の松村教授から返信があり、その人骨をしばらく借りたいと言われます。

5月2日付の松村教授からの手紙には、『骨は間違いなく人類のものであり、16～7歳ぐらいの年齢。化石化の程度から太古のものである』と書いてありました。

これを受けて、5月3日付大阪朝日新聞が3～40万年前の人体の骨盤現ると報道します。

ここから、この腰骨の化石の数奇な運命が始まるのです。

To be continued

…

信夫の発見が新聞で大きく報じられたことは、多くの学者の反感を買うこととなりました。

信夫は、西八木海岸の砂礫層から 旧象やメノウの石器を見つけており、『西八木海岸洪積層中発見の人類遺品』として論文を発表していました。

これは、旧象と同じ時代にメノウを加工する技術を持った人類が存在していたことを表しており、化石化した腰骨が旧象と同じ時代に生きていた人類のものであることを裏付けるものでした。

そのメノウの石器が 旧石器時代の打ち方とは違っていて 流れる間に傷がついた自然石で旧石器時代のものとは認められない と反論した人物がいます。

遡ること 7 年前 当時助手だった松村氏が属していた人類学教室主任の鳥居龍蔵氏です。松村氏は 鳥居氏に学位論文を提出し、書き直しを命じられたのですが、そのまま学位申請の手続きをとり、骨学の権威 小金井良精氏に相談し 小金井氏は理事長に話を通して論文審査が行われました。

小金井氏はすでに退官していたのに、主査となって まったく別のジャンルの植物学者まで加えて 鳥居氏抜きで松村氏の論文の審査を進め 通過させてしまいました。

これを事後承諾で知らされた鳥居氏は激怒して 東京帝国大学に辞表をたたきつけました。松村氏は これで理学博士となり、助教授になって 鳥居氏のポストに収まったのです。以後、鳥居氏と東京帝国大学人類学教室は激しい対立関係になるのですが、そんな裏事情など知らない信夫が 人類学教室の指導する人類学雑誌に投稿し 偶然にも松村氏がその編集にあたってしまったので 「坊主憎けりゃ…」と鳥居氏の批判を浴びる羽目になったのです。

鳥居氏の反論が追い風となり 信夫への風当たりはどんどん強くなって行きました。

「屏風ヶ浦の上の墓地から流出した人の骨だろう」という話から「名声が欲しくて あいつは自分で骨を埋めたに違いない」と詐欺師呼ばわりするものまで 心ない罵声で信夫はノイローゼになるほどでした。

5月の末に「ぜひとも現場が見たい」と知らせてきた松村氏も 6月に西八木海岸をちらっと見ただけで 即日 東京へ帰ってしまい、7月には「適当な比較資料がないので、今この骨を考察できないが、大切に保存しておくように。今度は自分の手で必ず発掘するのがよい。」という手紙が届きます。

傷心の信夫でしたが、小さいころから逆境には辛抱強く立ち向かうという考え方が身についていたので、この時も「自分が無名のアマチュア学者だから 信じてもらえないのだ。経緯だった勉強をした認められる学者になろう！」と 家族と共に東京への移転を決心します。

昭和7年のことでした。

To be continued

時が流れて、昭和14年 第二次世界大戦が始まりますが、もともと体が弱かった信夫は兵役を免れ、早稲田大学の教授の研究室で 教授の手伝いをしながら、研究を続けていました。

昭和20年5月25日 東京の空を焼夷弾が埋め尽くしました。

東京大空襲です。焼夷弾を落とされた街は ひとたまりもなく燃え上がり、信夫は病気の妻を助けだすのがやっとで 松村氏から言われた「大切に保存しておくように」という言葉どおり 長年片時も忘れずに保管していたあの化石化した腰骨を持ち出すことができませんでした。

こつこつと集め、積み上げてきた貴重な研究結果や資料は、信夫の気持ちを表すように 何度消しても消えず、その後10日間もくすぶり続けたそうです。

こうして多くの貴重なものを失った戦争は その年の8月 玉音放送で終焉を告げられました。

心の隅に離れないあの化石化した腰骨を抱きながらも、生きていくことに毎日を費やしていた信夫のもとに 昭和22年1月 東京大学理学部の人類学教室 名誉教授 長谷部言人（はせべ ことんど）氏が 松村氏が採っていた腰骨の石膏模型と現物の写真を見て、洪積世のものではないかと思い、研究して論文を発表したいという連絡が届きました。

さらに翌23年7月、長谷部氏は 人類学雑誌に 腰骨は50万年前の原人級と推定され、現物がないことから学名ではなく便宜上の名称であるとしながら「ニッポナントロプスカシエンシス」と命名した と論文を発表しました。

信夫の名前は表されず、論文も長谷部氏の名前での発表ではありましたが、それでもこれは 信夫にとって大変嬉しいことでした。

あの化石化した腰骨がようやく「明石原人」として日の目を見た日でした。

「長谷部教授も大きく推定したものだ…私は 20万年前くらい前のものだと考えていたが…」と笑ったそうです。

その年の10月、長谷部氏を長として 西八木海岸の発掘調査が始まりましたが、信夫には声もかけられなかったと言います。

じっとしていられなくて 見に行ってみると、かつての腰骨発見場所の崖は 波の浸食で十年の間に十数メートルも沖合になってしまっており、さらに発掘調査団は発見ポイントより80mもじっとしていられなくて 見に行ってみると、かつての腰骨発見場所の崖は波の浸食で十年の間に十数メートルも沖合になってしまっており、さらに発掘調査団は発見ポイントより80mも西を掘っていたのだそうです。

1か月の発掘で 収穫は植物化石程度に終わり、否定的データが人類学雑誌に発表され、明

石原人は再び幻となってしまいました。

To be continued

昭和 24 年 9 月 相沢忠洋氏が岩宿遺跡を発見し、日本に旧石器時代が存在したことが 学問的に位置づけられました。

翌昭和 25 年 6 月 栃木県安蘇郡葛生町で 洪積世の人骨化石が見つかり、信夫はそれをネアンデルタール人級のものとして判断します。

化石はさらに出土し続け、上あご、男性の左側大たい骨、女性の左側上膊骨、幼児の右側下あご、男性の右側大腿骨、幼児の左側上膊骨などが見つかりましたが、現在はそのほとんどが行方不明となっています。

昭和 28 年 5 月 第四紀研究小委員会 人類学会会長だった長谷部氏が 討議の結果 これらの人骨を 40~50 万年前のものとし、これらを葛生原人と名付けました。

信夫は 昭和 32 年 7 月に早稲田大学から文学博士の学位を与えられ、35 年春には、教授となりました。

相変わらず 研究に明け暮れる歳月が過ぎ、昭和 45 年 後の国立歴史民族博物館 名誉教授となる春成秀爾氏には「日本旧石器時代研究の先駆者」と位置づけられ、東北大学助教授の芹沢長介氏には、信夫発見のメノウの石器が明らかな人工的細工を加えられたものと確認され 信夫には穏やかな時期だったと言えます。

しかしながら、昭和 57 年 11 月 2 日 朝日新聞の夕刊一面で 「明石『原人』はいなかった」と報じられます。

東大理学部助教授の遠藤万里氏と独協医科大講師の馬場悠男氏が 明石原人腰骨の石膏模型を 猿人、原人、旧人、現代人と比較、統計処理した結果 1 万年前の人類で 現代人の 80 人に一人は「明石原人」に似ている と原人説を否定する論文を科学朝日に発表したのです。

これによって、教科書は書き換えられ、「明石原人」は教科書から姿を消しました。

ところが、翌昭和 58 年 9 月 29 日 朝日新聞大阪版で 愛知医科大 古人類骨研究者の吉岡郁夫教授は 遠藤氏、馬場氏の論文は腰骨が化石化していた事実を無視したものであるとし、「明石原人はネアンデルタール人種」と発表します。

吉岡氏は 縄文以降の人骨で化石化した例はないことを挙げ、遠藤氏らの論文の根拠がもともと欠けていた部分を相当復元したうえで測定した主観的データであると言いました。同時期の人骨でも形のばらつきは多く、1 個だけをとらえた統計処理には無理があり、そのデータを使って鑑定しても、明石原人の腰骨はフランスで発見された 20~30 万年前のアラゴ原人の特徴に似ているともいえる と主張しています。

吉岡氏は 現代人 52 体 92 個の寛骨と比較し、夥しい古人類骨データと突き合わせて 明石原人は 今から 3~15 万年前にヨーロッパから小アジア、ジャワなどで活動していたネアンデルタール人種にもっとも似ていると結論付けました。

昭和 59 年 11 月 春成氏は「旧石器考古学」の中で 明石人骨は結局 10 万年前ほどのネアンデルタール人級と断定し、翌 60 年 3 月 西八木海岸を再発掘します。

深さ 10m で砂礫層にあたり、植物化石と共に人的加工された木材片が発見されました。人骨などは発見されませんでした。この木片には少なくとも二種類の石器が使われた跡があり、信夫の発見した人骨化石が存在した可能性を裏付けるものでした。

信夫にとって 長年の辛抱がようやく報われる瞬間ではありましたが、この年の 11 月 1 日 明石市民会館大ホールで行われた市制 66 周年記念式典での文化功労賞受賞の知らせが 島根の病院のベッドに届いたときには 信夫はもう意識が朦朧としており、翌 2 日 83 歳の生涯を閉じました。

晩年、『私に拾われたばかりに 不遇な目に遭わせてしまった。申し訳ない。』と 消えてしまった明石原人の腰骨に謝る信夫の言葉を聞いたと この原人物語の参考とさせていた「見果てぬ夢 明石原人」の著者 直良三樹子さんは書いています。

昭和 61 年 3 月 西八木発掘調査結果が発表され、明石人は「旧人」と結論づけられました。こうして、半世紀にわたる論争にピリオドが打たれたのです。

**To be continued**

原人骨発見から 60 年経った平成 3 年 5 月 25 日 大久保駅前第 1 回明石原人まつりが開催されました。

JR 大久保駅から北に伸びる道が国道 2 号線に当たるまでが大久保商店街となります。

この商店街のほぼ真ん中あたりに位置する巖松堂（がんしょうどう）書店の店主 山根金造は島根の出身で 大の古い物好き…平成 6 年 10 月に新築オープンした巖松堂書店本社ビル内の店舗には 本棚の上にくぼみをつけて 所有の骨董品を並べています。

昭和 47 年 11 月に同じ場所で 7 坪の店からスタートする以前の昭和 45 年 2 月、神鋼機器明石工場に勤めていた金造は、右下腹部の急な痛みで大久保駅北の井内医院に運ばれます。盲腸炎でした。

8 日間の入院中 持て余す時間に看護婦と雑談する中で、金造は院長の井内功氏が著名な朝鮮古瓦のコレクターであることを知ります。

古い物好きの金造と井内氏が仲良くなるのに 時間はかかりませんでした。

やがて、金造が大久保商店街で書店を開き 日々の時間の使い方に自由度が出てくると、井内氏が発掘や骨董店めぐり、拓本採集、展覧会などへ出向く際のドライバー兼同行者としての誘いが増えて行きました。

金造も書店経営で忙しい中、学ぶことの楽しさからいつも二つ返事で誘いを受けたそうです。

やがて、集めた古瓦や出土した化石、朝鮮の古い家具類が金造の書店の事務所に積み上げられて行きました。

そうするうちに 茶道裏千家の伊原宗静師範を通じて瓦業を営む金造と同世代の西海勉氏と知り合い、西海氏も仲間に加わります。

こうして、井内氏の診療室授業が始まったある日、井内氏が「明石原人の骨を触ったことがある…」と話し始めました。

**To be continued**

日本医科大学の学生だった井内氏が明石に帰省していた時、西八木海岸で偶然 直良信夫に出会い、交流が始まったそうです。

昭和 7 年の夏休み、井内氏は信夫と一緒に、象の化石を求めて瀬戸内海の女木島で洞窟を調べ、弥生式土器などを発見しました。

信夫の指導で人類学誌に発表したその結果が、井内氏の処女論文となりました。

信夫はこの前年、あの「明石原人の腰骨」を西八木海岸で発見しており、井内氏は信夫の家を訪れ、その腰骨を 2 度ほどじっくり観察する機会に恵まれたそうです。

腰骨は完全に化石化し、褐色を帯びて重量感があった と井内氏は、金造と西海氏に語りました。

戦争でいったん途切れた井内氏と信夫の交流は、戦後、再開され、井内氏は信夫の業績の高揚と研究の継続を模索しました。

昭和 57 年 5 月、井内氏は島根県出雲市で暮らす信夫を訪ねました。

脳梗塞で軽い言語障害になっていた信夫でしたが、明石で考古学の若手を育て「明石原人を探す会」を結成したいと語る井内氏の言葉を熱心に受け止めていたそうです。

護岸工事が完成して、もう昔のように崩壊するような崖がないので、漁師やダイバーに頼んで海中を探す。

会の名前は「明石原人を追うロマンチストの会」にする という井内氏の言葉に 私がもう 10 年若かったら…とつけながら「原人は必ず出ます」と言ったそうです。

島根から戻った井内氏は興奮した調子で 金造と西海氏に信夫との約束を伝え「情熱と執念を持って原人を追いつける若者を育てたい。私は若い君らの運動を見守る顧問になる」と言って表に出るのを拒み、金造を会長に指名しました。

実のところ、金造と西海氏にはまだ考古学そのものへの希求はそれほど育ってはいなかったのですが、井内氏は引き下がらず、半ば無理やり金造が会長の「明石原人を追うロマンチストの会」が出来上がりました。

しかし、そうはいつでも実働 2 人の会では何もできず、当面日曜や祭日に井内氏のお伴をして、本を読み、底引き漁をする漁師の網にかかった化石を井内氏の「診療室授業」で鑑定する日々が続きました。

「ロマンでは飯は食えん！」という批判も浴びましたが、それでも金造たちは「原人が話題になれば強力なまちおこしにつながる」という手ごたえらしいものも感じ始めていたのです。

**To be continued**

年号が昭和から平成に変わった年、金造は JR 大久保駅北側の 80 店舗を取りまとめる大久保商盛会の青年部会長となります。

大久保商盛会は、近所にできた大型店舗のあおりを受けて会員減り続ける中で、創設 20 年を迎え 大売り出しなどの定期行事以外の買い物客の心にひびくイベントの仕掛けを考えていた時期でした。

その年の 4 月末に行われた「駅前まつり」では、ラーメンなどの食品を「20 年前の価格セール」として売り出し、買い物客に喜んでもらったそうです。

翌平成 2 年の 1 月 4 日付の新聞には「原人祭りでまちおこし」の文字が大きな見出しに躍りました。

金造が新聞のインタビューに答えて 語った内容が報じられたのです。

翌日の青年部の新年会で金造は、「原人発見の大久保で その志を繋ぐのは我々の義務」と切り出しました。

前日の新聞で金造の考えを読んでいたメンバーは「おもしろい！」とその話を受けて、企画、資金、組織などの計算もなく 全員が夢を語り続けたと言います。

やがて、商盛会役員も協議に加わり「原人の骨発見 60 年」のタイミングを 原人腰骨の「還暦」として 「明石原人まつり」は実施の方向に向けて進み始めました。

少ないスタッフではありましたが、アイデアと協力を求めて奔走する毎日に、西友大久保店の販売促進課長 金織氏が 総力を挙げてタイアップすると協力を申し出てくれました。

金造たちにとっては渡りに船。

なんとも心強く 嬉しい話でした。

それを機に風は一気に金造たちを応援するように吹き始め、構想は地域に広がって、郵便局、日本古生物学会会員の井上氏、日本の凧の会などが徐々に力を貸してくれるようになりました。



その年の4月22日は、原人腰骨発見地の西八木海岸をゴールにして、原人の史跡で説明をし、海岸で各自がお弁当を広げる「わが街再発見・ウォークラリー」を実施し、350人が参加しました。

中には原人ルックに身を包んだコンビも参加し、目を引いたと言います。

こうして、「1年かけてじっくりと企画を練る！」と決めた原人まつりのプレイベントは成功し、原人まつりの全体像が見えてきました。

### To be continued

平成3年3月 「明石原人を追うロマンチストの会」は「明石原人の会」と名称を変更し、明石スポーツダイビングの南会長、日本レクリエーション上級指導者の出井氏も企画に変わり、金造と西海勉氏は事務を担当することになりました。

そして、5月23日 西友大久保店の駐車場を会場として 第1回明石原人祭りがスタートしました。

主催は 明石原人祭り実行委員会と表示されましたが、実質は大久保商盛会と西友大久保店が取り仕切った開催でした。

明石市、明石市教育委員会、明石商工会議所、明石商店街連合会、各自治会、JR 西日本、神戸新聞社などの後援もいただき、アカシ象などの化石約100点を展示する「原人化石展」「日本の凧作り実演」、地元小学生の描いた「原人絵画展」、「明石瓦の歴史・製法展」など、オープンと同時に家族連れが押し寄せたそうです。

明石市とは隣り同士となる播磨町の大中遺跡・古代まつりを企画した 鄭光均(ジョン・カンギョン)氏は、テーマソングとして「原人まつりの唄」を作り、民族衣装でオカリナのミニコンサートを披露してくれました。

第1回明石原人まつりは4日間続き、最終日の26日にはメインイベントの「原人パレード」が行われました。

これは明石原人まつりの超目玉企画でしたが、事前の公募では「えー、かぶり物お〜?」「恥ずかしい」といった理由で なかなか応募がなく、スタッフは協賛企業に足しげく通い、一本釣りで説得してようやく40人の原人をそろえたという裏話もあります。

朝、本番に備えて大久保駅前に集まってきたのは、全身に墨を塗った本格派、トラの毛皮やドンゴロスをもとった店主、手製の石斧や槍を持ち、アカシ象の模型を引っ張るデパート店員、花の冠を被ったおしゃれな原人など それぞれの創意工夫が感じられました。金造は、化繊のかつらを被り、ひげを生やして 黒い毛皮をもとった裸足の原人を演じました。

ウォークラリーのゴール西八木海岸では 古代食、金魚すくい、火起し体験、古代イノシ

シ狩り(石投げ)、ダイビング、地層説明などが準備され、ごったがえす縁日のような騒ぎだったようです。

直良信夫のロマンが息づく化石の海 明石海峡へは 明石浦漁協の「明石丸」が出港し 底引き漁で「原人の骨を発見する」という夢の試みに挑戦しました。

原人が主人公という目新しさ、奇抜さが評判を呼んで 4 日間で 35000 人が集まり、第 1 回明石原人祭りは 金造たちの狙い通り 大成功を収めました。  
スタッフ 約 40 人 経費は 763,000 円でした。

ところが、イベントの開催は即 店の売り上げにつながるわけではなく、まちおこしも同様に効果はすぐには現れません。

ただでさえ忙しい商売人が 2 日も 3 日も留守にするわけにはいかない、原人は趣味 との声も上がり、「スタッフと経費集めに限界がある。継続は難しい」と、その年の秋、大久保商盛会は「主催返上」を決定することとなったのです。

**To be continued**

町が一つの目標に向かい、まつりで盛り上がった気運がイメージを高めていく と実感していた金造は、なんとしても生まれたばかりの町づくりの芽を摘み取るわけにはいかないと 「明石原人まつり」を継続していく方法を模索しました。

大久保商盛会が返上した「主催」は 「明石原人まつり実行委員会」で受け、取り急ぎ 組織を大久保全町に拡大して乗り切ろうと考えて、金造は大久保町連合自治会に協力を依頼しました。

7 万人の住民をすべて包含する組織に協力してもらえらなら きっと町ぐるみに進化するだろうと思ったのです。

自治会正副会長会議に、商盛會会長と共に出席した金造は 一生懸命 まつりの意義を訴えました。

商盛會会長からも「商盛會から相応の資金の提供」の申し出も出て、連合自治会の協力は取り付けることができましたが、残念ながら連合自治会に実働スタッフを求めることはできず、金造は組織と人の課題を抱えたままでした。

明石市には 地域の住民が共同体意識を高めることを意図して作られたコミュニティセンターというシステムが 各小学校区、中学校区に存在し、略してコミセンと呼ばれていません。

金造が次の的を絞ったのは このコミセンでした。

交渉を始めて間もなく、金造はコミセンサークルの連絡会で代表を務める椎原孝徳氏と出

会います。

椎原氏は、コミセンの連合文化祭を仕切るベテランで、どの催しにも顔が利きました。

金造は、椎原氏の経営する店に日参して、祭りの内容や資金、人集めについて細かく話し合い、全町組織の実行委員会形式にして 明石原人まつりを継続していく道を探り当てたのです。

## To be continued

平成4年も5月21日から4日間で 明石原人まつりの人出は4万人に上りました。

メインデーとなる最終日は JR 大久保駅から原人パレードが出発するのとほぼ同時に 西八木海岸と大久保農協から「ぶらり散歩」と題して 市民がゴールの石が谷公園を目指して歩き始めました。

石が谷公園ではカラオケをはじめとするステージイベントが目白押しとなり、出店ブースや火起し体験が人気を集め、おまつりらしい形が整ってきました。

お隣の播磨町からは大中遺跡の弥生人が9人訪れ 盛り上げに一役買ってくれたそうです。

「連合自治会の下で婦人会や老人会の皆さんが資金集めに力を貸して下さい、企業の協賛も増え、一軒一軒こまめに歩き寄付をお願いして 約100万円ほどを集めて乗り切った」と 金造は自らの半生記をつづった「明石原人に魅せられて」という著書の中に書いています。

この後、明石原人祭りは祭りの会場を 西八木海岸と石が谷公園に移し、日程も4日間から2日間へと短縮しましたが、第3回、第4回と順調に回を重ねて行きました。

石が谷公園には 明石乗馬協会が隣接しています。

おまつりに馬がいたら、きっと楽しいにちがいない と考えた椎原氏と金造は、第3回の原人祭りに ポニーの乗馬体験をと 明石乗馬協会に依頼しに行きます。

ちょうどその頃、もっと地域に貢献したいと考え始めていた明石乗馬協会は、金造たちのその依頼を機に 明石原人祭りに全面的協力をする事になりました。

広いスペースのとれる石が谷公園の会場には 当時 省エネ、エコの先駆けモデル企画となったフリーマーケット100件が出店し、ポニーの乗馬体験もある一風変わったお祭りがあると マスコミも興味を示し始め 近畿一円のラジオやテレビの取材も多くなってきたのもこのころです。

金造の思いは 苦勞こそあれ順調に花を開いていきました。

さて、第5回はどんな企画にしようかと相談を重ねているさなかの1995年1月17日午前5時47分 誰もが驚いたあの大地震が起こったのです。

## To be continued

未曾有の大地震は 阪神高速をなぎ倒し 三宮のシンボルだった高いビルを壊し、穏やかに善良に暮らしていた人々の生活を一変させました。

大久保町も大きな揺れに家の屋根瓦などがずれたり、壁に割れ目が走ったりしましたが、電気もガスもすぐに復旧し、神戸ほどの大きな被害は受けませんでした。

神戸と明石…親戚や友人が犠牲になった関係者もいましたし、何よりもおまつりなどという空気ではとてもなかったこの年、明石原人祭りは中止し、関係者はみんな ボランティアで復興支援に力を注ぎました。

翌年、阪神間はまだまだまざまに地震の爪痕をのこしておりましたが、ここは祭りを再開して 復興への元気づけを と「震災復興支援 やっとうでー明石」を合言葉にイベント展開を決心したのです。

原人の腰骨が発見された西八木海岸会場に 火起しでつけた火を点火した千灯籠が 堤防の端から端まで並べられ 暗い海に光の帯を作りました。

言葉ではない祈りの現れでした。

**To be continued**

第 6 回から金造は 椎原氏に変わって実行委員長を務めることとなりました。

乗馬協会理事長だった三木則男氏が事務局長となり、体制は徐々に整っていきました。

新聞販売所を経営する山上昌之氏は、地域のミニコミ誌の発行元でもあります。

編集部があり、担当する記者兼編集者もおりました。

地域密着型のマスコミ、メディアという立ち位置なこともあり、地域おこしの明石原人祭りはやはり否が応でも注目せざるを得ないものです。

担当記者が取材に行くのも当然のことでした。

金造は、この時も熱く明石原人とまちづくりへの思いをとうとうと語ったのだと思います。

ちょっと困り顔で「どないしたらええやろねえ～」と首をかしげる金造に、記者が思わず「それならこうしたら…」と自分のできることを言ってしまったことは その場面に直面した人なら責めることはできないでしょう。

こうして金造に巻き込まれてしまった自社発行紙の担当者を奪還しようと 山上氏は金造に談判に行くのですが、彼もまた金造の語り口に引き込まれ 自分でも気づかぬうちに明石原人祭りに関わりを持ってしまうのです。

平成元年に、喫茶店を始めた私、西海恵子は、毎月 海外向け格安航空券情報が載っている雑誌を巖松堂から購入していました。

当時 350 円だった電話帳のように分厚いその雑誌を届けに来た金造は、決まって 400 円の

コーヒーを飲んで帰りました。

3月頃のある日、『金ちゃん、玉子の安売りとかじゃなく 外国人の留学生とか集めて 自分の国のもの 売ってもろたらええんちゃう？みんな喜ぶし、円高やから留学生も助かるし…』。

無責任に原人まつりの企画を提案してしまったのです。

顔がぱっと明るくなった金造は「そうや！そらええなあ！」と言って帰ったかと思うと 数日してまた喫茶店を訪れました。

「みんなに言うたら、そらええアイデアやって喜んでな…おっちゃんが説明してもええねんけど、ひょっとして恵子ちゃんがおもてんのとちごたらあかんから、いっぺん会議に来てもらわれへんやろか…」

もともと 自分でするつもりなどまるっきりなく、ただ思いつきを口にただけなので、会議など面倒くさいと何度か断りましたが、数日するとまた金造が現れて、次の会議の日程を伝えて行くのです。

1か月ほど経って、また金造が会議に来いと誘いに来たので「夜8時半まで用事が入っているから」と断ると「会議は9時までやねん。30分だけでええから 来て」と言います。言いわけができなくなって、仕方なしに市民センターで開かれるというその会議にししぶ出席すると、ドアを開けた瞬間、当時 事務局長だった三木氏に「ただいま 国際交流担当の西海恵子さんが来られました」と紹介されました。

それだけでも話が違ふと思うのに、席に着くと、「それでは 説明をお願いします」と…こうして、私もまんまと金造の網にひっかかってしまったのです。

**To be continued**

平成9年の第6回明石原人祭りの事務局長となった三木則男氏は、明石乗馬協会の理事長である傍ら、ダイブセンターノリスというダイビングを扱う会社の社長でもありました。彼の提案で、明石原人祭りも、プランニングセクションが立案した企画を 各イベントの実施部門に落とし リーダーが責任を持って取り仕切る というシステムティックな体制に整理されていきました。

西八木海岸会場での企画は、『二体目の明石原人を見つける！』というテーマの下、ダイブセンターノリスの呼びかけで全国からダイバーを集め、当時 ノリスに在籍していた世界で5人と言われるダイビングインストラクターを認定できる資格を有したインストラクター多羅尾氏がリーダーとなって 海に沈んだ原人腰骨発見の地層を目視して化石を探查するというものでした。

西八木の沖はなだらかに傾斜した海底が一気に200mほど落ち込み、さらにその落ち込みが流れの速い明石海峡の海流に削られて ひさしのような形にえぐれています。

そのえぐれたひさしの下部分が もっとも原人化石発見の確率の高い箇所と言われている

ます。

ところが、化石の海と呼ばれる西八木沖は 潜るとまるで「味噌汁」をかき混ぜた時のように泥が巻き上がり 視界はゼロに近くなるのだそうです。

しかも、『ひさし』の下は光が届かず、明石海峡の海流は 少し油断をするとすぐに淡路の南側まで流されていくという速さ…世界で5本の指に入る技術を持った多羅尾氏も「怖い」と言うほどでした。

そんな難易度の高い海に潜って「幻の明石原人の骨を探す」…こんなロマンに、全国の腕自慢ダイバーは心をくすぐられ、多くのダイバーが応募してくれました。

ダイビング中の海の中は、富士通の協力でインターネット中継され、西八木海岸会場の来場者はだれでも観ることができました。

これも画期的な企画でした。

あまりに速い海流と視界の悪さで 二体目の原人骨を発見することはかないませんでした。が、この企画は、全国的に注目を集め、NHK テレビや大手新聞社などの各メディアが競って取り上げました。

「明石原人の発見地」であることに誇りを持つ八木、谷八木、西八木の地域のみなさんも、「駅前の人らが一生懸命やっとなのに 地元がじっとしとったらあかん」と惜しめない協力をしてくれるようになりました。

そして、この年 平成9年9月18日 藤江川で明石原人が存在した可能性を裏付ける大きな証拠が発見されるのです。

**To be continued**

中学3年の時、海岸で拾った化石を直良信夫に送り「6~7万年前の石器です」という回答をもらって考古学に燃え、昭和60年に西八木海岸を再発掘した春成秀爾氏は 信夫の発見を裏付ける強力な証拠となる旧石器時代の木製品を発見することとなりました。

その際、学生ボランティアとして参加していた稲原昭嘉青年は やがて明石市に就職し、大好きな考古学を続けて行きます。

そして、平成9年 明石市教育委員会のプロジェクトとして実施された藤江川左岸の藤江川添遺跡の発掘調査に 明石市立文化博物館の学芸員の立場で参加した稲原氏は そこで赤みを帯びた乳白色のメノウの石器を発見するのです。

縄文時代の土器を含む地層より下にある砂礫層から出てきたのは 明らかに両面を加工したメノウのハンドアックス（手斧）でした。

信夫が、昭和6年のあの日、この物語のすべての始まりとなる褐色の腰骨の化石を発見したのと同じ砂礫層からの発見でした。

ハンドアックスは、その作り方や使用された石材、地層から 6~13万年前 後期旧石器時

代のものと判断されました。

長さ 8cm、高さ 3cm、重さ 100g の美しい埋蔵物は 近畿・中国・四国地方で最古の年代の出土品とされ、ネアンデルタール人と同じ時代の旧人が存在した有力な証拠となるものでした。

この知らせは 世界中で大きく報じられ、各国の新聞の一面を大きく飾る出来事となりました。

ネアンデルタール級の原人が 明石から最も近いメノウの産地である出雲地方が持ち込んだ可能性が高いとされた説に、金造は、信夫の遺志、井内氏の遺志が報われた気持ちがして、非常にうれしくなったのでしょ

う。新聞のコピーを何枚も作り、知り合いのところへ配ってあるいておりました。

さらに、いてもたってもいられなくなり、明石原人の会の仲間と共に稲原氏を乗せた車で故郷の島根県宍道湖畔へメノウを拾いに行ったほどでした。

## To be continued

協力者も増え、話題にも上るようになって、徐々に地域に根差してきた明石原人祭りではありましたが、130 万円ほどの運営資金の調達は毎年のおおごとに変わりはありませんでした。

商店主や地域住民などの個人からコツコツと寄付を募る村祭り方式だけでは無理があると金造は行政に相談を持ちかけますが、『個の祭りすべてに援助はできない』と断られ、日新信用金庫やロータリークラブ、民間企業などに足しげく通い支援を仰ぐ日々が続きます。大久保町に工場を置く大手飲料会社からは現品協賛をいただき、原人祭り当日にスタッフがブースで販売して 資金に充てるという形もありました。

「赤字変人」とも言われながら、それを笑い飛ばし、ギャグにする金造に、実行委員メンバーたちは励まされ 力づけられながら 毎年の企画を実行していきました。

インターネットの普及に加速がかかったこの頃、インターネットで「葛生原人祭り」を探し当てた山上昌之氏が「葛生原人」に連絡をとり、「明石原人」と「葛生原人」の交流が始まります。

葛生（くずう）は、栃木県安蘇郡に位置し、昭和 25 年 早稲田の人類学研究室にいた直良信夫が、洞窟で発見された化石を明石原人と同じ旧石器時代のものと判断し、「葛生原人」と名付けたことから 「葛生原人祭り」を開催していました。

いわば、兄弟まつりじゃないか！と盛り上がり、葛生町から「葛生原人」が 5 月の明石原人祭りに、「明石原人」は 8 月に行われる葛生原人祭りに参加し、お互いの良いところを学びあいました。

平成 10 年の 3 月 21 日、明石海峡大橋が完成し、車が通る前に…と橋を歩いて渡る「わたり初め」が開催されました。

金造の掛け声で、「原人」23 人が集まり、原人衣装にゼッケンをつけて 明石海峡大橋を往復しました。

最初は、「えー、恥ずかしい…」とか言っていた「原人」たちも 歩き終わる頃にはもう慣れて、「原人」のまま喫茶店に入って休憩したものです。

今思えば、あれも、金造の作戦だったのかもしれませんが。

**To be continued**

明石原人祭りをしようと思い浮かんだ平成元年の暮れ、金造はまちづくりを考える「明石まちづくり研究会」に誘われ 出席しました。

駅前の商店街で本屋を営む金造にとって、異業種交流しながら 原人祭りの意図である「まちづくり」の知識を学べることは ことのほかありがたいことだったようです。

第 7 回目の明石原人祭りが終わった頃、金造はある大きな決心をします。

「まちづくり」を考えて 明石原人祭りを続けてきているけれど、財政面を筆頭にさまざまな制約がかかる…工夫はするにしても、もう少し行政からの歩み寄りには期待できないものだろうか…ここは、自ら飛び込んで改革の道を探さなければ…

「明石市会議員への立候補」これには、周囲は驚きました。

原人祭りの活動を通してぶち当たる行政制度の壁が 金造に立候補を決意させることになったのですが、「原人祭りを売名行為に利用した」との批判も浴びました。

この立候補を機に、金造は、政治とは無関係な民間のまつりという立場を貫く明石原人祭りを退き、実行委員長は三木則男氏に引き継がれました。

当時の私は、外国人や海外の製品、飲食を提供する店舗をまとめる国際交流バザールの部分を担当していただけで、明石原人祭り全体のことまではまだ分かってはいませんでした。この一連の「騒ぎ」を三木氏は逐一 私に連絡してきました。

そして、図らずも一部始終を知ることとなったある日、三木氏と山上氏がそろって私を訪れ、これからどうしようかという「会議」が始まりました。

3 人だけのその「会議」で、結局のところ 三木実行委員長、山上副実行委員長、西海事務局長が決まってしまったのです。

またしても「不意打ち」のような人事でしたが、第 8 回明石原人祭りは目の前で、もうそのメンバーでやりぬくしか選択はありませんでした。

**To be continued**

第 8 回明石原人祭りが行われたのは、1999 年、平成 11 年のことでした。



相変わらず運営資金には四苦八苦しなながら、実働メンバーも少数という事態ながら、なんとか明石原人祭りを盛り上げたいと、新体制の実行委員会は 西八木海岸の海のまつり、石が谷公園の山のまつりに加え、駅南の神戸製鋼跡地にできたマイカル明石ショッピングセンターを中心とするマンション群 オーズタウンを突き抜ける大通りを「街のまつり」会場として加える企画を打ち出しました。

駅から南北に伸びるゆりのき通りは 北からマイカル明石 1 番館、2 番館、3 番館を区切りとして 3 ブロックに分けられています。

もっとも北の駅ロータリーを含むブロックなら 交通への影響を最小限に抑えられるので、その部分を全面通行止めの歩行者天国にしようというのです。

マイカル明石自体が 平成 9 年 10 月のオープンだったので、当然と言えば当然ですが、それまで一度もやったことのない試みでした。

実行委員会は、警察にも相談し、行政にもマイカルにも JR にも相談して この大きなプロジェクトを動かそうとしましたが、前例のないこの申し出に事態は進まず、刻々と時間が過ぎて、さすがの実行委員会も「やっぱりだめか」と諦めの空気が漂い始めたある日、突然に扉が開いたのです。

ここまで書きながら大変申し訳ないのですが、この場面については何がどう動いたから事態が急変したのかを詳細にご説明することは避けさせていただきます。

しかしながら、『救世主』がいたこと、そして大きな権威は「初めてのことを嫌がる」ものだということだけ述べておきます。

とにかく、実行委員会は大喜びでした。

勢いは、人を呼び込むものなのでしょうか…この時期には、新しい企画を持って現れた若い仲間、また仲間が加わり、新しいセクションも生まれました。

原人バンドやインターネットラジオ放送の FM オクトバは、若い仲間が一人では「夢」だった「想像」を、組織の力とそれぞれ個人の得意分野を合わせることで実現した産物でした。

市外の FM 局に声をかけて、街のまつり会場から現場中継…そんなことも実現しました。西八木海岸海のまつり会場から 火起しでつけた原始の火のたいまつを持って原人が走り、駅ロータリーに設置されたステージの両脇におかれたかがり火に点火して 街のまつりから海のまつり会場へと開催のバトンを渡す…そんなことも実現しました。

ゆりのき通りの歩行者天国に フリーマーケットを並べ、場内のあちこちでミュージシャンが演奏する…そんなことも実現しました。

この企画の成功は、実働メンバーの平均年齢を一気に下げる効果がありました。

そして、三木実行委員長が次に持ち込んだ「ミレニアムイベント」へと駒は進んでいきます。

## To be continued

20世紀から21世紀へと変わる瞬間…おそらく多くの人的一生に1回の経験となります。

1999年9月、明石市ではカウントダウンイベントの実行委員会が組織されました。

参加した市民団体は、明石135度の会、ACC（アカシクリエィティブクラブ）そして、明石原人まつり実行委員会。

AKASHI 千年祭とタイトルして、前年にオープンした明石の東端に位置する大蔵海岸と子午線明石の象徴 天文科学館の2か所が会場となりました。

1999年から2000年に変わる瞬間なので、'99年12月31日から2000年1月1日にかけての深夜イベントとなります。

明石135度の会は天文科学館から大蔵海岸に向けて一筋のレーザー光線を放ち、時の街明石をアピールしました。

明石原人まつり実行委員会は、大蔵海岸会場の運営を担当し、その年の原人まつりで若い力を発揮したメンバーたちがステージやブースを回っていました。

午前0時 明石海峡大橋に虹色のライトが灯り、花火が打ち上げられ、若い原人たちはスーツに着替えて ステージからシャンパンを配って新しい年をお祝いしたのです。

イベントは午前1時には終了しましたが、ブースは夜を徹して営業され、会場の撤収は1月1日の午後4時頃までかかってしまい、これにはさすがの若いスタッフもへろへろにつかれたものです。

2000年、平成12年にはそれまでの葛生原人との交流やカウントダウンイベントへの参加が情報として流れ、埼玉県庁から実行委員会に連絡がありました。

その年、秩父市の小鹿坂遺跡で50万年前のものとする旧石器とともに住居跡が発見され、北京原人より古い世界最古の原人が存在し、洞窟で生活していたという定説をも覆す人類史上最大の発見だと 埼玉県あげての大騒ぎとなっていたのです。

## To be continued

「それなら、秩父も原人まつりをしましょう！これで、日本三大原人まつりとなりますよっ！」

埼玉県庁の若い職員さんの声で、埼玉県と秩父市から視察団が明石原人まつりを視察に来られました。

あいにく海のまつりが開催される土曜日は雨で中止。

海の中に作ったステージがさびしそうに雨にぬれて、本来ならあそこでご紹介するのですが…と説明した後、葛生原人、秩父原人と明石原人の交流会となりました。

翌日は、山のまつり 石が谷会場に3原人がそろって立つことができました。

その年の夏、秩父では「秩父原人まつり」が盛大に行われ、明石から明石原人まつり実行

委員会の面々をご招待を受けました。

県をあげての力の入れようが まつり会場のにぎわいに現れており、立ち並ぶブースには秩父原人酒、秩父原人まんじゅう、秩父原人ケーキ…ありとあらゆるものが元気のよい呼び声と共に来場者の関心を買っておりました。

小鹿坂遺跡も見せていただき、ご招待いただいた明石原人一行は「ほう～、ここから出たんですかあ～」と感心したものです。

ところが！

明石に帰って間もなくしたその年の秋…新聞、テレビなどで衝撃のニュースが流れました。

「旧石器ねつ造事件」です。

次々に考古学上 重大な遺跡や遺物を発掘、発見して「ゴッドハンド」と呼ばれていた藤村新一氏の功績がすべてねつ造だったと発覚した事件です。

秩父の小鹿坂遺跡も彼の手によるものでした。

この事件は 日本考古学界最大のスキャンダルとされ、中学高校の歴史教科書はもとより大学入試にまで影響が及ぶものでした。

この事件の発覚前までは、藤村氏の発掘成果によって 日本列島の旧石器時代の始まりは、アジアで最も古い部類に入る 70 万年前までさかのぼっていたとされていたのですが、彼のねつ造が発覚し、日本の前期、中期旧石器研究はすべて疑われ、『日本は歴史を歪曲した』と歴史問題で日本と対立する国々から叩かれる事態にまで及びました。

埼玉県も秩父市のみなさんも とても力を落としておられました。

そしてまた、直良信夫の発見した「明石原人腰骨の化石」も「ロマン」に戻ってしまったのです。

## To be continued

2000 年の終わりには、国のミレニアムイベント「JAPAN カウントダウン」が企画されていました。

沖縄で 20 世紀最後の夕日、犬吠埼で 21 世紀最初の朝日…そして、世紀が変わる瞬間はやはり日本標準時の時の街 明石だろうということで、前年 AKASHI 千年祭としてミレニアムイベントを開催した大蔵海岸が 日本の三大会場の一つに選ばれました。

明石原人まつり実行委員会も明石市の千年祭実行委員会として「明石市の時間」を担当することになり、ふさわしいイベントのアイデアを話し合いました。

が、まじめに考えるときにはいいアイデアなど浮かんでこないもので…ミーティングが煮詰まって 冗談を言い始めた時 学生メンバーがふと「夜の海に原人やろ…ここはたいまつ持って 火まつりとかあ～！」と言い始めました。

「ああ、2000 年の終わりに 2000 本のたいまつ～！」

「あ、大蔵海岸って鳥みたいやん！フェニックス～！」

この会話に「あ、それ！いいねっ！」と食いついたのは実行委員長の三木氏でした。

世紀の変わり目に火起しでつけた原始の炎の中から不死鳥が浮かび上がる…確かに火を扱うのは、原人の得意技でした。

全市から 2000 本のたいまつを持ってこのイベントに参加する人が募られ、実行委員会では彼らをどのように誘導し、どんなふうに火をつけて行くのかが連日のように話し合われました。

実際、大蔵海岸に集まって 何秒で火が付くか、何分で何本のたいまつに火を送ることができるか、その火は何分燃えているのかなど 実験が繰り返されました。

また一方で 実行委員会のメンバーは実施日に備えてたいまつ作りも手掛けました。

実は、朝日新聞記者の要望でたいまつリレーのリハーサルをすることになり、たいまつは 2000 本の倍、4000 本が必要になったという裏話もあります。

12 月 31 日、若いメンバーたちが一緒に頑張ってくれたおかげで、多少のトラブルはありながらもたいまつリレー参加者の誘導もうまくいき 22:00~23:30 の明石市の時間、大蔵海岸に見事な炎のフェニックスを羽ばたかせることができました。

22:30 からの 15 分間は県の時間で、姫神という女性のコーラスグループがステージで世紀末のムードを盛り上げました。

そして、いよいよ世紀が変わる瞬間、フランスの著名なデザイナー イブ・ペパン氏が世紀の花火をプロデュースし、波打ち際から一斉に花火が上がりました。

確かその予算が三億円だったように覚えています。(違っているかも…なので、額が大きかったという程度にご理解ください)

原人の起こした原始の火からイブ・ペパン氏の花火まで 火の祭典は新しい世紀を迎える感動を人々の心に刻むこととなりました。

## To be continued

明石市は、大蔵海岸で、1999 年の AKASHI 千年祭、2000 年の JAPAN カウントダウンと 2 度の大きなイベントを経験して、2001 年平成 13 年の夏、同会場で花火大会を企画しました。

もう 30 年以上続いていた明石市民まつりを、花火大会として大蔵海岸に持ってこようという計画です。

そして、起こったのがあの歩道橋事故でした。

明石原人まつり実行委員会は、この花火大会には関係しておりませんでした。新聞やテレビなどのメディアは、前年、前々年の様子などを聞くために、実行委員長である三木氏に頻繁に取材を求めてきました。

私も何度か取材を受けたことを覚えています。

大きな出来事だったので、明石市民まつりはこの後 休止となり、どうして事故が

起こったのかの検証が何度も何度も重ねられました。

ちょうど4年の任期が終わって市長が変わり、新しく就任した北口市長は、歩道橋事故の遺族に深く謝罪をしたうえで、市民のために明石市民まつりの再開を目指しました。

相談を受けた三木氏から、さらに相談、協力を求められる形で副実行委員長の山上氏が関わるようになり、翌年には事務局長の私も明石市民まつりの再開に向けての会議に呼ばれるようになりました。

明石市民まつり再開への会議は、通年で何度も行われましたが、明石原人まつりはその間も例年通り開催を続けておりました。

平成14年第11回目の明石原人まつり開催にあたって、実行委員長は三木氏から山上氏へと引き継がれました。

三木氏は明石乗馬協会の理事長であり、ダイブセンターノリスの社長であり、奄美大島にあるペンション「ネイティブシー奄美」のオーナーであり…さらに日本馬術連盟、障害者乗馬など多岐にわたる事業に加え、明石市民まつり再開へのプロジェクトが大きく彼の時間を占めて行ったのです。

明石原人まつりはこの年から副実行委員長から実行委員長を引き継いだ山上氏と事務局長の私の二役体制となりました。

歩道橋事故を受けて沈んだ明石に元気を取り戻そうという気持ちもあって、この年の明石原人まつりのテーマは「なにがなんでも原人まつり～明石に元気を取り戻す」とされ、西八木海岸の海のまつりでは魚やタコの「つかみどり」が行われました。本当にがむしゃらに実施した原人まつりでした。

折しも、直良信夫生誕100年展が明石文化博物館の主催で行われ、オーストラリア国立キャンベラ大学の名誉教授となった信夫の長男 博人氏が明石を訪れており、山上実行委員長と私は、彼に会う機会に恵まれました。

メノウの石器が発掘された藤江川の岸にまだ発掘調査用のプレハブが残っていて、その2階で博人氏の話聞くうち、思わず惹きこまれてしまいました。

私たちには会ったこともない「直良信夫」がまさにそこにおいて、明石原人を追いつける深い深い執念といってもいいような思いで 私たちに語りかけているようだったのです。

To be continued

平成16年の春、直良信夫が原人の腰骨化石を発見した西八木海岸から1kmほど東の海沿いに八木遺跡公園が完成しました。

明石原人まつりは、それまで西八木海岸を海のまつりの会場としてきましたが、海

岸への降り口はとても急な斜面でしたし、海岸もそれほどには広くなかったので、この年、実行委員長の山上氏は思い切って、新設された八木遺跡公園に海のまつり会場を移すことを決定しました。

八木遺跡公園は、旧街道沿いに遊具などが置かれる広場から海に向かって石段を下りて行くと、サイクリングロードを隔ててすぐに海岸に続いています。

海岸と公園の両方なら西八木海岸よりぐっと広がる～！と実行委員会は喜びましたが、八木遺跡公園はその春に完成したところで、芝生が定着するまで公園は使えず、海岸だけで実施することになりました。

海岸に大きな四角い穴を掘り、ブルーシートを敷いてプールを作り、公設卸売市場の魚屋さんをお願いして 鯛やアナゴを放しもらった「原人魚つかみ」は大好評でした。

夜は、波打ち際にかがり火が燃え、ライトアップされた明石海峡大橋をバックにしたステージで原人たちが海のまつりに興じました。

そして、この年の夏、3年の休止を終えて、明石市民まつりが再開されました。

明石原人まつり前実行委員長の三木氏は 明石市民まつり実行委員会の実行委員長となり、原人まつり現実行委員長の山上氏は、市民まつり実行委員会の副実行委員長となりました。

再開の明石市民まつりは、当初の市民構想からは大幅に規模を縮小した県立明石公園を会場にして開催されました。

公園は機動隊に囲まれ、周囲は物々しい交通規制が張られ、警察も市役所の職員も総出で安全確保に努めるという一大イベントでした。

それほどにあの歩道橋事故からの立ちあがりハードルが高かったのです。

明石公園は、大きく千畳芝エリア、剛の池エリア、西芝エリア、東芝エリア、櫓のあるお城エリアに分かれています。

このお城エリアを除く4つのエリアを、4つの市民グループで担当し、再開の市民まつりが行われました。

西芝エリアは、明石原人まつり実行委員会がリーダーとなるエリアでしたが、原人まつり実行委員長山上氏は市民まつりの副実行委員長となってしまったので、代わって私が西芝エリアをまとめることとなりました。

そんな経緯があり、翌年 私は市民まつり実行委員会の民間事務局長となり、明石原人まつりの事務局長と二足のわらじをはくことになるのです。

To be continued

翌平成 17 年 第 15 回目の明石原人まつりは、明石市民まつりで明石公園を使った経験を生かして「杜のまつり」とタイトルして、土曜日の昼間の明石公園を 1 会場増やして 3 会場で行うことになりました。

西芝生広場にステージを設けて 保育園の子供たちの鼓笛隊やシルバー世代の合奏グループに出演してもらい、世代間交流を図りましたが、実際、大久保エリアと明石での 3 会場開催は スタッフの少ない実行委員会には少々ハードな企画でした。

というわけで、翌年からはこの企画の反省を反映して、八木遺跡公園と石が谷公園の 2 会場に落ち着くこととなるのです。

明石市民まつりは、市民主体の開催を目指すにあたって 任意団体の実行委員会から法人格をもった NPO 組織にするための準備段階として 民間事務局を設けることになりました。

庁内に、一部屋 民間事務局のスペースを作ってもらい、私がそこに常駐することで、1 年かけて明石市民まつりを作り上げていく市のやり方を学ぶわけです。

市をあげての市民まつりは、原人まつりよりはるかに複雑で、煩雑で、大変なものでしたが、まだこの頃は 庁内の職員さんたちに大半を助けてもらっていたので余裕がありました。

平成 18 年 第 16 回目の明石原人まつりを終える頃、明石市民まつり民間事務局は NPO 法人の認証をもらい、法人の登録も済ませるところまで進みました。

個人的ながら、私は NPO 申請手続きをする傍ら、第 16 回明石原人まつりを組み立てて、実施したことになります。

このあたりの明石原人まつりの記憶が曖昧なのは、おそらくあまりにすることが多すぎたせいだろうと思います。

とにかく、バタバタとやり切った時期でした。

明石市民まつりの NPO 法人は、市民まつりの実行委員長三木氏が理事長となり、副実行委員長山上氏が副理事長につきました。

そして、私が事務局長となり、明石原人まつり実行委員会は実行委員長と事務局長が 明石市民まつり役員との兼任というなかなかややこしい事態でした。

企画はもちろん毎月のように実行委員会を開いて話し合い、その間には警察や行政側との会議、そして理事会も頻繁に開かれ、事務局は実働に加えてそれらの会議の準備にも追われました。

原人まつり実行委員長の山上氏も、明石市民まつりに時間を割かれるので、原人まつり開催時期になっても 協賛金を集める時間をとるのが難しくなり、「赤字変人」は依然として払拭できないままでした。

## To be continued

とにかく人手不足だった明石原人まつり実行委員会は、平成 19 年「原人—新時代発掘！～ Discover the new one！」をテーマに「二体目の明石原人化石を求める思いに加えて、新しい人材、新しい企画も模索していました。

明石市民まつりと明石原人まつりの二股をかける事務局のメリットは、以前より情報が増えたことです。

この年、明石市民まつり NPO まちとまつりプロジェクトが受けた話の中に「明石サービスエリアの活用がありました。

上下線が中央のレストランを挟んで行き来できる特殊な作りである明石サービスエリアには、レストランの南に日時計のある広場があり、そこを活用して利用者に愉しんでもらえるイベントを考えてほしいというものでした。

何度かフリーマーケットや音楽ライブもしましたが、明石サービスエリアには、徒歩でなら石が谷公園の梅林へ抜けられるという特徴がありました。

つまり、高速道路を降りずに、サービスエリアに車を置いて「石が谷公園に来ていただけるのです。

明石原人まつりには「乗馬協会の協力で馬を使える強みがありました。

そこで、明石市に掛け合って「石が谷公園の梅林の中を中央体育館まで馬で移動する許可をもらい、「ポニータクシー」を実施したのです。

梅林は、起伏がある上に「途中であずまやと遊歩道を繋ぐ橋の下をくぐる部分もあり、馬で移動すれば、ちょっとしたアドベンチャー気分を味わうことができました。

そして、到着した体育館の中には、天文科学館が新調した移動プラネタリウムを誘致しました。

天文科学館はこの移動プラネタリウムを市民に体験してもらいたいと考えていたので、設置できる場所と機会を求めているのです。

その年の明石市民まつりは、花火を希望する市民の声を受けて、明石公園から市街地に出ることになりました。

それまで市役所周辺で開催されていた明石市民まつりでは「まつりの最後に海から花火が上がっていました。

市民はあの花火を明石の夏の風物詩として「大人から子供へと受け継いできていたのです。明石公園は県の史跡となるので、火気は厳禁。

明石公園での花火の再開はあり得ないと、市街地に会場を移すことになったのです。

ところが、会場を「車も人も往来のある市街地に移動するには、交通量や通行量、段差やルートなどさまざまな調査が必要となり、夏の開催には時間不足でした。



それでも、花火の可能性を求めて 異例の秋の昼間開催ということでのじり寄るように警察との折り合いをつけたのです。

秋の市民まつり開催とその後片付けに押されて、翌年の明石原人まつりはまたしてもバタバタのうちの開催となりました。

To be continued

平成 20 年の明石原人まつりでは ステージを全面 明石市民まつりに貸し切って「明石市民まつりオーディション」が行われました。

明石原人まつりのご来場者と審査員が投票して 市民まつりのステージにたつ出演者を決めるというものです。

もちろんその中でも明石原人まつりのメインイベント 原人パレードは続けられました。

もうこのあたりの原人パレードは、初期のころの原人とは違い、猿の着ぐるみあり、馬の被りものあり、はたまた豹柄やゼブラ柄のおしゃれな衣装でのカラフルなパレードとなっていました。

ブースとの協力で 参加者は腕やほっぺたにボディペイントをして楽しみました。赤や紫のかつらを被った派手な原人もいましたし、親子でタヌキの着ぐるみを着てのご参加もありました。

ステージのミュージシャンたちのクオリティーもあがり、ブースも充実してきたこの頃、明石原人パレードは 毎年 新聞やテレビで取り上げられておりましたが、平成 21 年の原人まつりには、イベント全部を 2 時間番組にするという企画のため、明石ケーブル TV 収録スタジオとして 1 テントが現れました。

「まちスタあかし」です。

そんなご縁を通して、明石で人気者になったミュージシャンたちもいます。

この年の夏の明石市民まつりが、結局 再開後最後の明石市民まつりとなるのですが、まだこの年の夏の時点ではわからないことでした。

秋になって、会場としていた明石銀座通りから市役所をつなぐ観光道路の電線を地中化する計画が上がり、明石市民まつり NPO はごったがえします。

市民まつり実行委員長の三木氏も副実行委員長で原人まつり実行委員長の山上氏も事務局長の私も 当然この出来事と共に揉まれる立場にありました。

To be continued

インフルエンザが流行って 大勢が集まる機会を作るのは危険という指導が入り、

好天に恵まれながら原人まつり開催を見送った年もありました。

川魚のつかみどりをしようってどじょうをいっぱい仕入れたのに、雨が降って、どじょうの処理に困った年もありました。

小学校の運動会と重なって 車は溢れるのに 人が集まらないなんていう年もありました。

さまざまな出来事を受け取りながら続けてきた明石原人まつりに 昨年、新しい企画が持ち込まれました。

「明石原人ビール」と「明石原人バーガー」です。

明石原人ビールは、ながさわ明石江井ヶ島酒館の明石ブルワリーさんからのご提案でした。

ラベルに入れる明石原人まつり実行委員会のオフィシャルキャラクターを募集して、絵を決めました。

同じころ、魚住の桧亭さんから「明石原人バーガー」が持ち込まれました。

鳥取県の大山町で行われているとっとりバーガーフェスタに その「原人バーガー」をご当地バーガーとして持っていこうというのです。

全国ご当地バーガーグランプリを獲得できれば、新しい明石の名物となって 明石がもっと活性化するじゃないかと。

負けずに ながさわさんも「明石原人マンモスバーガー」なるものを開発しました。

桧亭さんは、さらに「明石原人ドーナツ」を打ち出しました。

現在、これらの「原人グルメ」を明石原人まつり実行委員会は公認して 応援しています。

2015年明石原人まつりは、若干の紆余曲折があり 日程を9月に延期して開催することとなりました。

新たな「原人グルメ」や奇想天外なイベントアイディアが飛び出してくることを期待しております。

一旦 終了